

風蓮湖のいま、そしてこれから

～風蓮湖の健全な水循環の確保に向けて～

日時：平成22年3月25日（木）13：00－15：00

会場：別海町マルチメディア館

基調講演「湖の未来は、地域の未来（琵琶湖などの事例を交えて）」

NPO法人 碧いびわ湖 代表理事

琵琶湖ラムサール研究会代表 村上 悟 氏

昨日、滋賀県から北海道に、ここ別海に寄らせてもらいました。昨日は別海町役場と風蓮湖流入河川連絡協議会の安部会長のお宅、それから副会長の松原さんのお宅に寄らせていただきまして、この地域のことのお話を聞きました。

この近くに来たのは、もう十何年ぶりで、もともと私は渡り鳥が好きでして、雁を追いかけて北海道をグルグル回って以来のことです。今日こうして、このようなご縁で寄らせていただいたのを本当にうれしく思っています。しばらくの間ですけれども、どうぞよろしくお願ひします。

今日、私がお話しさせていただこうと思っていることは、これから色んな方が、風蓮湖の保全に、さらに輪を広げて関わっていかうということです。

スライド文字：「多くの関係者が集って湖を守ることの意義とは？」

先ほど副町長さんが仰っていたように「健全な水循環」をどう作っていくのかを考えたときに、誰か数人だけ頑張ればできるものではなくて、いろんな関係者が手を携えていく必要があるわけです。そこまで努力してこれから色んな課題を越えていくことに、どんな意義があるのか、皆さんと一緒に考えたいと思いました。

と申しますのは、「いや、あたりまえじゃないか、風蓮湖は大事じゃないか」と皆さん思っただけですが、皆さんの中できっちり共有しておかないと、どこかで行き違いが生じることを、私は経験してきました。

最初は一緒にやれていたのに、途中から「あれ？この人なんか違うんじゃないのかな」。そういうことが、どうしても起きる。

みんなが心をつにして、湖の保全に取り組んでいくために、最初のお話はこういうことをさせていただければよいかなと思って用意しました。

スライド：今日の結論（意見）

地域の中での顔の見える「絆」が、かけがえのない未来への財産となる

先に結論を申し上げますと、この地域の中で、風蓮湖の流域の中で、顔が見える絆というものが財産

になる。湖の一度壊された環境というものは、簡単には戻りません。しかし、戻していこうとすることで出来る人の繋がり、というものが、湖の保全を超えて、地域における大きな財産になる。

今日、大変うれしいのは高校生のみなさんが沢山来ていただいているのですけども、これから地域の産業とか、地域の未来を担っていく人たちが、この場に一緒にいてくれるのは、とてもうれしいことだと思います。今日ここに集まれた皆さんは、まだお互い顔も知らない方もたくさんいらっしゃるかと思いますけれど、これをきっかけとして新しい繋がりができていくようになればいいなと思います。

スライド：自己紹介1 生育履歴（1976年滋賀県産）
自然好きの少年→環境科学の学生→自然再生NPO職員（茨城県）→大工見習い。自営・自給→環境生協職員⇒碧いびわ湖代表理事

まず、私の自己紹介を簡単にさせていただきます。

昨日たくさん牛さんを見たので、生育履歴としたのですけども(笑)滋賀県の生まれでございます。76年ですので、年齢が33ですかね。もともと滋賀県の中でも田舎のほうに育ちまして、人口が4,000人に満たない小さな町で育ちました。父が滋賀県内で自然保護活動をしていた教師だったことが影響して、小さなころから魚を採ったり、鳥を見たりということをしてきました。地元の県立大学がちょうど私が大学に入るときにできまして、全国で初めて環境科学部という学部ができました。そこで環境科学を学んで、特に自然環境、地域づくりを学びました。その時の写真が、カムチャツカに行った時のものです。雁の調査で行きました。

大学院を出てから、茨城県で（霞ヶ浦という湖があるのですが）自然再生NPOに3年ほど勤めたのですけども、ここで私は大きな壁にぶち当たりました。ここでの仕事は、NPOがコーディネーター役を担って、学校や役所であるとか地元の企業と連携して湖の再生に取り組んでいく仕事だったのですが、私自身が湖の保全に必要なことを知識としては知っていた。実際に皆さんと一緒にやりましょうという時に、上手く作っていただけの現場での力がなかったのです。頭で分かっているだけでは、人は一緒に動けない。それで一度、現場を離れようと思い、地元に戻り家を建てる大工さんをしてみた。それから自分の田んぼを耕すという、一番基本的な、自分で暮らすということから始めました。

そう働くことで、目に見える仕事をする中で、人と一緒に成し遂げるといった基本に立ち返った。

そして一昨年、滋賀県環境生協という、環境でいいものを買って使って暮らしを変えていきたいと思いますという生協なのですが、その職員になりまして、昨年代表理事を務めています。

スライド：自己紹介2「生業－暮らしを変える市民事業体」
子どもと湖が笑っている未来へ「碧いびわ湖」
共同購入＝せっけん・リサイクル品・地域貢献商品
リサイクル＝廃食油・牛乳パック
住まいづくり＝浄化槽・雨水タンク・地域材利用
学習交流＝広報・講演・調査企画

今、私が仕事にしているところは「碧いびわ湖」という団体です。「子どもと湖が笑っている未来」と書いています。

あとでお話ししますが、琵琶湖の流域の社会も色々な課題を抱えています。それを解決していくことのベースになるもの、それは身近な暮らしにあると考えており、その暮らしを変えていくことを私

たちの生業（なりわい）としています。NPOなのですが、商品を皆さんに買ってもらったり、リフォームしたりしている、ちょっと変わったNPOです。

事業としてやっていることは、四つ程の柱がありまして、一つは共同購入です。環境に良いものしか扱わない。合成洗剤は使いません、リサイクルした物を出来るだけ使う。それから買うことで地域の環境に貢献できる物。今回のアサヒビールさんですね。そういう意味では環境に貢献した商品の一つなのですが、そういう商品を扱っています。

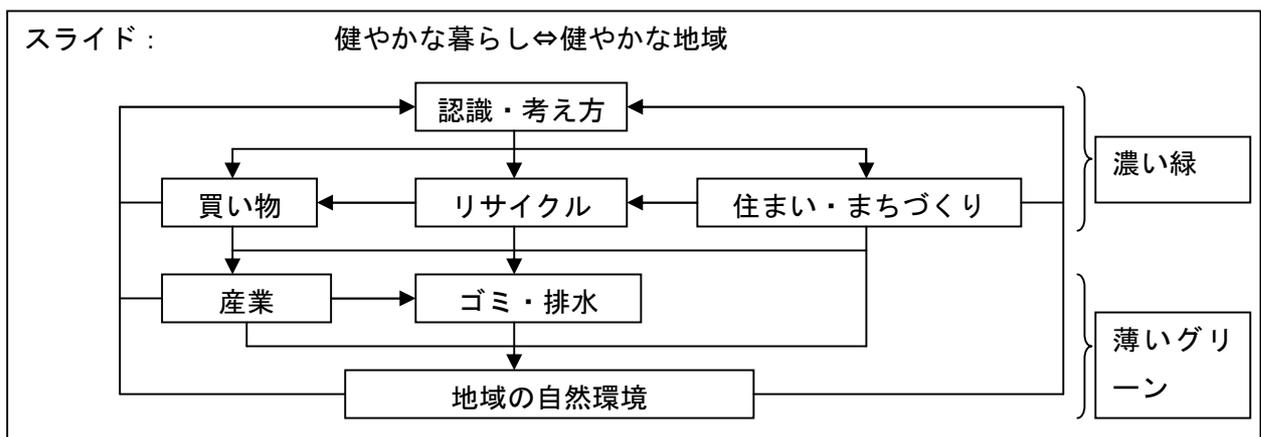
それから、リサイクルの取り組みです。私たちの団体のできた元々が、廃食油を集めて石鹼にすることから始まった団体です。牛乳パックも集めています。よく北海道産の牛乳も、パックを集める時に見つかります。今日は届けられている元まで来られたのだというふうに思っています。

牛乳パックを製紙メーカーに送って、ティッシュペーパーにして自分たちで使っている。「おかえりティッシュ」という名前になっていまして、自分たちが出した牛乳パックが返ってくることで「おかえりティッシュ」と名付けているのですが、北海道までお帰りになったのは（実物を持ち上げて）これが初めてです。（笑）

それから住まいづくりですね。私どものほうでは合併浄化槽を設置しようということからスタートしています。ただ単に環境基準をクリアすればよいというものではなく、流した水で魚が住めるような水質の良いものを使おうとしています。浄化した水をもう一回トイレの洗浄に使って、使う水の全体の量を減らそうという取り組みをずっとしています。雨水タンクとか地域材を利用した物を使うとか、住まいで出来ることをお勧めして、実際に皆さんに使っていただきましょうという取り組みをしています。

それからもう一つが「学習交流」です。広報誌を作ったり、（こういう形で）お話をさせてもらったり、調査・商品企画だとか事業だとかをやっています。

こういうふうに見ると何でも屋さんみたいですがけれども、もともと、生活というのは何でもありませんよね。物売りではなくて買う人の、あるいは住まう側の共同体という形でやっています。



風蓮湖もそうですが地域の自然環境を守っていくためには、直接的にできることも勿論ありますけれども、とても大きな影響を持っているのが産業であったり、私たちの暮らし・町から出ていく排水とかゴミです。それを変えていくためには家庭での買い物だとか、ゴミの出し方だとか、あるいは住まいや街の在り方だとか、こういうものを変えていくことが最終的に、自然環境に影響を与えていく。それを変えていくためには、それぞれの認識や考え方を変えていかなければならない。

（スライドをさして）濃い緑の部分が私たちのできること。下の薄いグリーンの方は結果として変わってくる。私たちが生活者としてできる場所は、上の部分ですね。まずそこをみんなで少

しずつ変えていけば、オセロのようにズラズラと変わっていくのじゃないか。そういうことを願いながら、ひとりひとりにお話ししながら輪を広げています。

スライド：ボランティア－琵琶湖ラムサール研究会
(同研究会の HP トップページを表示)

もうひとつ、ボランティアで活動しているのが琵琶湖ラムサール研究会というものです。

琵琶湖は1993年にラムサール条約地に登録されています。風蓮湖から数えると12年前になります。でも、ラムサール条約のことを、あまり皆さんは知らないのです。一般の人、行政の職員の人、あまり中身をよく知らない。せっかくラムサール条約に登録されているのに、使わないのはもったいないので、みんなで活用しましょうと2001年に活動をスタートして、このようなホームページを作成し、ラムサール条約に関する情報が手に入りやすいようにしています。

スライド：ボランティア－琵琶湖ラムサール研究会
(同研究会の HP：ラムサール条約とは)

主な内容としては、講演集を作っています。ラムサール条約に関する講演などで、とてもわかりやすかったものがあります。それらを集めています。(スライドを指し)例えばこれは96年に小林聡史さんが講演された記録です、

スライド：ボランティア－琵琶湖ラムサール研究会
(同研究会の HP：ラムサール条約とこれからの湿地保全のありかた)

(スライドを指し)そしてこれは今日コーディネートをしてくださる辻井先生が、2000年に滋賀県にきてお話しくださったときのものです。

こういうものを載せていますので、ラムサールって何なのだろうな、と知りたい方は是非閲覧してください。

スライド：ボランティア－琵琶湖ラムサール研究会
(同研究会の HP：ラムサール条約の主な決議・勧告・手引きの一覧)

それからもう一つ、ラムサール条約が出している文書があります。ラムサール条約は3年に一回、会議を世界中で転々と開催します。その中で、いろいろな決議をしています。

スライド：ボランティア－琵琶湖ラムサール研究会
(同研究会の HP：決議V7 ラムサール条約登録湿地とその他の湿地のための管理計画)

たとえば、これから風蓮湖でも必要になってくる管理計画をつくる。湿地を守るための管理計画を作っていくためには、どういう手引きが必要か、どういう手順でやるのか、どういうものをつくるのか、ラムサール条約は指針を出しているのですね。こういうものを出しているのですが、なかなか皆さんの手元に届かない。それを和訳したものをホームページに掲載して、誰でも見られるようにしています。

ラムサール研究会と検索して、活用していただけると、ありがたいと思います。

スライド：琵琶湖の紹介
(風蓮湖と琵琶湖の位置関係、日本地図で示している)

少々、紹介が長くなりましたが、今日は琵琶湖のことをお話しさせていただきます。その中で風蓮湖にお役立ちになりそうな情報を持ってまいりました。

場所ですけれども、風蓮湖が北海道の道東地域にありまして、琵琶湖は近畿地方にあります。

風蓮湖は(見ていただければわかりますが)海がすぐ近くにあつて、砂が寄ってきてできた湖です。

琵琶湖は内陸にできた湖です。ここは断層にできた湖ですので、底も大変深く、一番深いところでは100mを超えています。湖のタイプとしては風蓮湖とは全く違う湖です。

スライド：琵琶湖の紹介

(滋賀県の県境がほぼ流域。京阪神 1400 万人の水源)

琵琶湖の、(集水域といいますけども)琵琶湖に入ってくる水は、琵琶湖の県境とほぼ重なります。

ちなみに私が生まれたのは一番上にある「余呉湖」という場所なのですが、琵琶湖の従兄みたいに近くに小さな湖がありまして、その肩で私は生まれました。滋賀県の北のほうは田舎です。

滋賀県の南のほうは街になっておりまして、さらに南にいきますと、京都があり大阪があります。

琵琶湖は淡水湖であるので、大きなダムみたいな役割を地域で果たしておりまして、大阪・京都の水源として使われています。

関東はダムをたくさん造っていますが、関西は琵琶湖が大きなダムとして機能していますので、生活用水・工業用水に安定的な供給ができています。

スライド：琵琶湖の自然：多くの固有種

(ビワコオオナマズ・ゲンゴロウブナ・ホンモロコ・ビワマス、ビワクンショウモ・ネジレモ)
(ヤマトカワニナ・ナリタヨコエビ)

自然の特徴はたくさんの固有種がいます。固有種といいますのは、琵琶湖にしかない種です。琵琶湖は300万年から400万年前にできた湖といわれていまして、世界で数えてみても十の指の中に入る、古さだと言われています。大変古いので、そこで長く棲んでいるうちに、そこにしかない種ができます。たとえばナマズでもビワコオオナマズが生息しています。マス科の魚でもビワマスというのがいます。海に出ないで、琵琶湖を海のようにしてまた川に戻るといふ魚です。いわゆる陸封型、サツキマスの系列です。あと、貝・水草・プランクトンなども固有種がいます。

スライド：琵琶湖の文化：独特の漁業・食文化

(各種漁法と「ふなずし」)

魚種の習性も違いますので、それぞれの魚種に合わせた変わった漁業があります。特徴的なのが「追いさで漁」といってアユを採る漁ですけど、琵琶湖ではアユも海に下りないで琵琶湖で大きくなります。大きくなるといっても、これくらいの小さな大きさにしかならないので、アユをとるのにカラスの羽をつけた棒で追い、岸で待っていた網ですくう漁をします。

食べ物では「ふなずし」。皆さん召し上がったことはありますか。独特のナレズシで臭みのある鮓です。これに使うフナはニゴロブナといまして、琵琶湖にしかない魚です。漬け込んで、さらにご飯と一緒に漬け込んで、仕上げる寿司なんですけども、これも固有の魚と周りの水田からできたお米と一緒にできてきた固有の食文化といえます。

スライド：琵琶湖の文化：ヨシの産業利用と景観
(よし・葦葺き屋根・ヨシ地の景観)

ヨシが伝統的に利用されています。琵琶湖は潟のような湿原地域がありまして、そこは昔からヨシの刈取場として活用されてきました。田んぼよりも時には反収がよいと、大きな財産でした。京都が近いので加工して商品する産業が発展しました。

スライド：琵琶湖の流域：農業、工業、観光業が盛ん
(水田、文化財、工場、林業(低迷中))

流域の産業ですけれども、風蓮湖の周りは酪農ですが、滋賀県は米どころで水田地域となっています。出荷額で大きいのは工業で、近くに高速の幹線道路がありますので、大手の企業を誘致しています。滋賀県は割と自然豊かなイメージがあるのですが、工業で支えられている面があります。

それから彦根城など文化財がありまして、観光も盛んです。

林業も一応あるのですが、それほど盛んではなくて、低迷しております。

スライド：風蓮湖と琵琶湖

	風蓮湖	琵琶湖	
面積	57.5km ²	670.33km ²	12倍
最大水深	11.0m	103.58m	9倍
平均水深	1.0m	41.2m	41倍
湖の種類	汽水湖	淡水湖	
集水域面積	1,054.8km ²	3,848km ²	4倍
集水域人口	5.3万人	140万人	26倍
乳牛数	64,000頭	4,270頭	1/15

簡単におさらいしますと、面積ですが琵琶湖のほうが風蓮湖に対して12倍ほど、水深が(琵琶湖が)ずっと深いです。風蓮湖は汽水湖ですが、琵琶湖は淡水湖です。

集水域、琵琶湖が4倍ですが、風蓮湖のほうが広い所から水が流入してきています。

人口は琵琶湖のほうが断然多い。牛の数は断然、風蓮湖のほうが多い。

こうしてみると、牛の体重などを考えると、大きい負荷がかかるだろうと考えます。

琵琶湖のほうが深く水の量が多いですから、簡単には影響が出てきにくいのに対して、風蓮湖は浅い湖ですから環境への影響は出やすいと思います。ただ、回復していくスピードは浅い湖のほうが早く回復していくものと思います。

スライド：風蓮湖と琵琶湖 富栄養化
(北湖と南湖のT-PおよびT-Nの折れ線グラフ)

風蓮湖と琵琶湖、いろいろな問題が似ているところがあるのと、昨日現場を見せていただいて感じました。

まず富栄養化、これは琵琶湖のデータですけれども、1960年ころから燐・窒素が増えてきました。そこで合成洗剤を使わないようにしようしたり、下水道整備をしたり、徐々に値は安定してきてい

る。回復できたとは言えませんが、かなり生活圏からの汚濁負荷が下がってきているといえます。

スライド：風蓮湖と琵琶湖 シジミの漁獲減少
(風蓮湖のシジミ水揚げ量の推移・棒グラフ) (琵琶湖のセタシジミ漁獲量・棒グラフ)

次にシジミです。先ほどお話しにあったように(スライド、これは別海町のデータを使わせていただいたのですが)85年からザーッと下がっています。

実は琵琶湖は1950年代くらいから激減しています。琵琶湖にはセタシジミという琵琶湖にしかないシジミがいて、僕が小さい頃はまだ食卓に上がっていましたが、今はほとんど手に入りません。減少原因の一番は農薬での瀕死が多かったと聞いています。その後低質の、砂地が少なくなって泥地になってしまった。今でも一生懸命セタシジミの復活を願い、漁協や市が取り組んでいますが、大きな成果が出ていないのが現状です。

スライド：風蓮湖と琵琶湖 乾燥化・ヨシ群落の減少

風蓮湖でヨシ地が減ってきていると昨日、伺いました。あるいは湿地といわれる部分が減ってきていることが、滋賀県でも起きてきていた。例えば(スライドを指し)これは琵琶湖の一部なのですが、琵琶湖の中には風蓮湖と同じように砂地ができてきて、湖でなくなったところがたくさんあります。干潟のようなところがありまして、私たちは内湖と呼んでいる。昔は大きな内湖があったものが、干拓されていくということが、戦後の食糧増産の時に行われた。この大中之湖というのは、近江牛(肉牛)がたくさん飼育されている。このようにして段々、内湖がなくなってきて、湖岸のヨシも道路にされたり農地にされたりして、ヨシの群落が半減してしまいました。これが琵琶湖の中で、魚が産卵する場所が減っていることがおきている。

スライド：風蓮湖と琵琶湖 流域からの泥流入

それから土砂の流入もある。

風蓮湖では、農地の開発で土砂流出がおこる。あるいは雪などの影響もあるでしょう。

滋賀県も農業地帯なのですが、(スライドの写真は)農業排水です。代掻きのころ5月くらいですが、このような状況が起きます。かつては上の田んぼで使った水が、下の田んぼにも使われました。今は農地整備が進んで、水を各田んぼに引いて各田んぼが出しますので、使い切りの水になる。そうすると、水に入った肥料から土から全て一気に流れ出す。しかも兼業農家が多いので、作業時期が一気に重なります。ゴールデンウィークの頃、みんな一気に作業をする。ものすごい量が一気に出るのです。このような社会的なものやハードのもので、このような問題が起きている。

スライド：風蓮湖と琵琶湖 大型開発プロジェクト

琵琶湖総合開発(S47年~H9年)1兆9000億円

開発 ——— 保全
 |——— 治水
 |——— 利水

琵琶湖の環境に大きな影響を与えたのは大型開発プロジェクト・琵琶湖総合開発という国の事業です。建設省・農水省・厚生省が入ってやったこの事業が、琵琶湖に大きな影響を与えました。

今申し上げたように、大阪、京都の人口が増えて工業用水を大量に使うことに対応するために、明

治のころ琵琶湖の出口に造られた水門をグレードアップさせて、水位を操作できるようにした。それに併せて下水道も整備する、ダムを造る、治山行為もする、滋賀県がやりたかったことを下流の自治体や国のお金を使いながら開発をした。これが大きな影響を与えることになった。

特に水位の操作を人工的にやるというのは大変不自然なことで、湖の魚の産卵等に大きな影響を与えていることが、今でも指摘されているのですが、一度取り決めをした水位操作をそう簡単には変えられないでいる。

スライド：琵琶湖保全の歴史

0. 「赤潮」という衝撃 1970年代～

いろいろな形で私たちの暮らしだとか産業の在り方が変わっていく中で、琵琶湖の様子も変わっていきました。

それに対して、私たちの地域がどのような取り組みをしてきたか、ここからお話したいと思います。

最初に起こったのが1970年代の「赤潮」という現象でした。先程ご紹介した「富栄養化」によるものですね。この現象が起こったのが1977年、私が1歳のときです。

スライド：琵琶湖保全の歴史

1. せっけん運動～生活者による買い物から社会改革～

合成洗剤の追放を目指したせっけん運動 1970年代～

それまで琵琶湖の環境を破壊していたのが、開発だとか企業だとか行政だと思っていたのに対し、生活の中で私たちが何気なく使っている合成洗剤が理由だとわかり、大きなショックとなりました。当時私たちが使っていた合成洗剤の中にはリンとういうものが含まれていまして、これが湖の中のプランクトンを増殖させているのが原因と分かりました。じゃあ、せっけんに切り替えようと運動がおこりました。滋賀県のスーパーなどでは合成洗剤が駆逐されまして、メーカーから訴訟までおこされたのですけれども、それでも条例をつくってリンの入った合成洗剤を使わないという運動がおこりました。これが全国に波及していきました。

生活者が、主婦が自分たちの暮らしを変えていくというのが、ひとつ大きなきっかけでした。

スライド：琵琶湖保全の歴史

1. 抱きしめてBIWAKO～福祉と環境、命への賛歌～

1970年代～

こんなイベントが琵琶湖で起こりました。これは1988年ですが、200kmある周囲をみんなでぐるっと囲んじゃおうというイベントがあったのですが、もともと福祉施設の建替えの募金をするのが目的だったのですが、そこに琵琶湖の人たちが思い集まって、いろいろな団体が一緒になって一つになって手をつなぐという象徴的なイベントになりました。今でも語り草になっています。

自分たちが変われば、湖も変わる。ひとりひとりが変わっていけばいいんだという思いが根付きました。

スライド：琵琶湖保全の歴史

2. 行政施策の発達～行政施策の充実と、住民運動の衰退～

(琵琶湖研究所・滋賀県立大学・琵琶湖博物館、マザーレイク21計画) 1980年代～

そうした中で行政施策も充実していきます。施設もたくさんできまして、まずできたのが琵琶湖研究所。95年に県立大学ができまして、その直前に博物館もできています。こうして環境教育や調査研究をする機関がたくさんできました。

琵琶湖の保全計画（マザーレイク 21 計画）も県が策定するようになった。ヨシ群落の保全する条例、景観条例など様々な条例も策定された。こういう形で制度が整っていくのですが、一方で住民活動はどうかというと、ちょっと一休みしてしまった時期だと考えています。

赤潮だとかアオコというのがおこってくるのですが、リン（合成洗剤）から「せっけん」に変えて、リンが合成洗剤から抜けて、やるべきことはやったんだけど、琵琶湖の状態は変わってこない。

あるいは先生が難しいことを言うとかですね（笑）皆さんの身近でなくなっていった。琵琶湖に関わる機会が減ったこともあります。

琵琶湖で泳ぐだとか、琵琶湖で魚を獲るだとか、そういうことをしなくなっていた。そうすると琵琶湖はとても縁遠いものになり、琵琶湖は守らなければならないとは、みんな口々に言うのですが、じゃあ琵琶湖にどんな魚がいるのか訊くと皆知らない。そういう人が増えてきた。

施策としては整っているのですが、熱意が冷めてしまった。

スライド：琵琶湖保全の歴史

3. 市民活動の事業化～人脈とノウハウを生かした事業～

（滋賀県環境生活協同組合、山門水源の森を次世代に引き継ぐ会）1990年代～

それでも一部の市民活動をしていた人たちが、少しずつ継続していくための仕組みを作ろうと動いて行くようになった。私が勤めた滋賀県環境生活協同組合もまさにそうで、せっけんを利用してもらう、回収する、リフォームしていく、そういう事業をしながら人が外に常時入れるようにする。

これは人を常に雇っている状態ではないですが、小さな湿原を盗掘から守ったり流域整備したり、それをするためガイドをしながら対価を得て、みんなボランティアで出るんですけど少しはお金を受取って、会にお金を落として整備に役立てようと活動している。このような活動が少しずつ起こるようになった。

スライド：琵琶湖保全の歴史

4. 住民・企業・行政の協働～役割分担と連携構築～

（魚のゆりかご水田～湖と田んぼをつなぐ～）2000年代～

このようななかで地元企業も入ってくる。住民と行政が、それぞれ出来ることを力を出し合いながらやりましょうということが起こる。これは「魚のゆりかご水田」というプロジェクトです。先ほど申しました、田んぼの用排水の在り方が非常に大きく変わりました。かつて、琵琶湖と田んぼはつながっておりまして、雨がたくさん降ると水位がグッと上がって、田んぼに魚が入れるようになっていた。ナマズやコイやフナがはいってくる状況だったんですが、水路が掘り下げられましたので、魚が上げられなくなってしまった。そこに魚道をつけようということで、行政も農家も、地元のグループや土地改良区も一緒になって行い、こういう田んぼが少しずつ増えてきました。ここでできた「魚のゆりかご米」を道の駅などで売っているのですが、ちょっと高いのですよ。高いのですけども買っただくと、その農家さんを応援できる、そういう取り組みが少しずつ広がっています。

スライド：琵琶湖保全の歴史

4. 住民・企業・行政の協働～役割分担と連携構築～

（菜の花プロジェクト～食とエネルギーの地産地消～）2000年代～

それからこれは私たち環境生協がベースとなってやってきたことですが、廃食用油を集めているのですが、それをBDFで使う、バイオディーゼルにして使う。それをやりかけました。その元となるナタネも自分たちで植える。遊んでいる農地を使っていこう、地域の人を活かす、地域の農地を活かす、こういう形で地域の中での資源循環をつくっていく動きが始まって、これも全国に広がっています。

スライド：琵琶湖保全の歴史

4. 住民・企業・行政の協働～役割分担と連携構築～滋賀だけでも 455 団体(全国 2946 団体)
(滋賀グリーン購入ネットワーク～行政も企業も地域の消費者～) 2000 年代～

企業の参加という点では、一消費者として環境に良い物を選んで買おうという、グリーン購入の活動が滋賀県ではいち早くおこりました。今、全国規模のグリーン購入ネットワークというのがありまして、2,946 団体が加入していますけども、滋賀が発祥です。まず私たちのような個人がやっていたことを、行政が取り組んだ。それから企業が一緒に入って、県内の大手企業を含む 455 団体が、良い物、安い物ではなくて、それを買うことで環境負荷が小さくなったり、環境が改善される物を買おうという、そういう連携がおこってきました。

スライド：琵琶湖保全の歴史

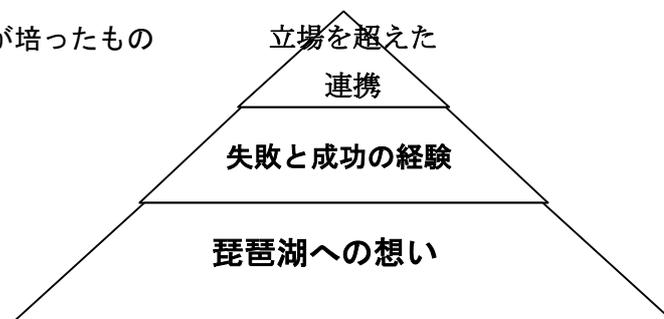
4. 住民・企業・行政の協働～役割分担と連携構築～
(湖東地域材循環協議会～山にお金を返す～) 2000 年代～

それから、山の問題です。滋賀県の山は林業として成り立っていません。特に木材価格が下がってしまって、出しても売れないという状況で放置されている。木が大きくなりすぎ、荒れた木が放置されて、雨が降ったときなど大きな災害になってしまう。それを少しずつでも木を動かすようにしようと、湖東地域材循環協議会というのが作られ、地元の山主さん、製材所、行政いろんな人たちが一緒になって木を動かすための働きかけをしている。

その中の一つが、紙を湖東地域材でつくる。それを地元で買って頂いて、山の維持ができるだけのお金を山主さんに支払う。山主さんと協定をして、山主さんの儲けになるのではなくて、未来に木を育ててもらうためのお金ですと協定をして、山主さんが山を守る役割を果たしてもらうためのお金を、ちゃんと渡すという、今少しずつですけども動き始めています。

スライド：琵琶湖と滋賀の今

琵琶湖保全、30年の歴史が培ったもの



こうして振り返ったときに、琵琶湖の 70 年代からおこってきた歴史で培われたものは一体何だろうなと振り返りますと、琵琶湖、湖への思いというものが、せっけん運動であったりだとか、琵琶湖

でのイベントだったりだとかによって、広く共有されたということが一つにあります。そのうえで、さまざまな試行錯誤が行われて、失敗もたくさんしてきています。住民団体も失敗してきたし、行政も失敗してきたし、でも試行錯誤の中で、これが駄目だとわかったことが地域にとって大きな財産です。

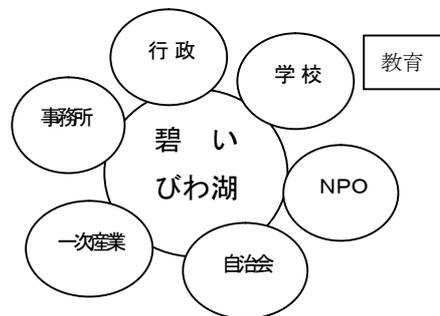
今これをやろうとした時に前も駄目だったので、こうした方が良い。あるいはこういうふうにやったら良いんじゃないかなあ、というものが地域の中で共有されてきました。じゃあ流域の離れた所でも、こちらでやっていた事例をこっちでも、と比較的行われるようになってきました。

立場を超えて人と人との関係というものができました。ある人は一行政マンなのだけれども、地元に戻れば一住民。ある人は企業人なのだけれども、ある時はボランティア。そうしていろいろな人が橋渡し役、それぞれの人が橋渡しとなって、連携ができてくる。

このことで困ったら、あの人に訊けば良い。ぱっぱっぱっと連携ができています。

スライド：これからの展望

連携の輪をつなぎ、広める



と言いましても、琵琶湖はまだ問題を抱えたままです。今日ご紹介した以外にも、問題のデパートじゃないかという位たくさんの湖の問題が、外来種の問題であったりとか、ダムの問題もそうですが、いろいろな問題を抱えている。

それを解決していくための一つの足掛かりになるネットワークができたのかなあというふうに思います。立場を超えた中での、ちっちゃな輪ができていて、それを私たちがNPOとしてつないでいく役割も果たさせてもらっています。

この輪が広がっていくことで、行政の人たちがまた違う層の仲間たちを広げていく。学校の人、一般の人も広げていく。グリーン購入のネットワークも段々広がっていく。こうやって一つ出来たことが、また次へと。輪が複層的に広がっていくことで、滋賀県の流域をカバーする。

これには木の年輪のように長い時間がかかると思うのですが、最初の核になる3人4人が、5人100人になる。そういう核ができたのではないかと考えています。

それができたときに、湖の保全ができるだけではなくて、地域での課題に取り組める素地ができている、ということを感じています。

例えば、学校教育ですね。学校は今、これから生きる力を育てていこう、あるいは職場体験なんかもして行こう。そういう時にあそここの間、湖と一緒にヨシ植えをやった、その時の話をしてもらおう。こういうつながりができてくる。

あるいは福祉関係、子育てだとか障害者だとか。そういうことについても、人が足りないといったら、農業で人手を貸してもらえませんか、人のネットワークができてくる。

自治会でのまちづくりでも学校の人に入ってもらおうとか、一次産業・漁業、農業、林業にNPOが手伝いに行きましょうとか産業づくりでの人を育てていく、新しい仕事を作っていく、いろんなものをつなげていくことで、新しいビジネスをおこしていく、湖を保全することでできてくる波及効果と

ういのは、地域課題を克服していく、人のネットワークになっていくということです。

スライド：まとめ

湖を守ることは、子供たちの未来を守る、地域の「絆」を育むことである

1. 守りたいものを、伝えよう
個人的な想いを大切に、万人に伝わらなくてもいい。
2. 互いに耳を傾けあおう
互いの違いを認め合って、できれば相手の現場に身を置いて。
3. 協力し合えることを探そう
互いに進んでやれることを、シンプルで具体的なことがいい。

まとめになりますけども、湖を守っていくということは、子供たちの未来を守る・地域の「絆」を育むことです。

そのために大事なものは何なのか、私なりに考えてみました。

ひとつは、私が守りたいものはこれなんだと表明する。私は（守りたいものは）人それぞれ違って
も良いと思っています。きっかけになっていくものは、私は魚かもしれない。私は鳥かもしれないし、
ある人は景色かもしれない。

でもそれを「風蓮湖のここが大事なんだ」ということを「好きなんだ」ということを、みんな個人的に持っていることが大事だろうと思う。

そうではないと先ほど言った計画が、滋賀県の行政施策が進んだときがそうです。計画の方だけが先にできてしまうと、こういうふうに決まっているからこうにやるんですよと、いつの間にか変わってしまうのですよね。

そうではない。それぞれの人が大事にするものを、ずっと持ち続けるのが大事だと思います。

今ここですでに始まっている、植樹の活動などもそうだと思います。それに賛同する人たちが、一緒に仲間になる。

次のステップが、互いに耳を傾けあう、ということです。この部分が実は一つのハードルになります。

自分の大事にしているものを、他人にも大事にしてほしい。つい思うのですが、そこに温度差がある。それは至極当然のことと思うのですね。私はこれが大事、あなたはこれが大事、その時にあなたがこれを大事にしているのだったら、その大事なものを私もせめて壊さないようにします。あるいは、困っているところがあったら、ちょっと手を差し伸べる。そういう関係ができてきたときに、立場を超えた連携ができてくるのです。最初一人のときはいいんですけど、仲間ができたすとあの人たちは私のことはわからない、とかゆうことが起きやすいんですね。そういう時こそ、その人達がしている作業に参加してみるとか、瞬間的な場面の中で相互理解できる部分が大きいと思うのですね。協議会のような場が開かれることがよくあるのですけれど、なかなか言葉だけでは伝わらない。一緒にやってみて、苦労とか楽しさを味わってみたら、それって案外面白いんじゃないのって、できる気がします。ここが時間のかかるところではありますが、仲間が立ちあがっていったと考えて、それぞれが取り組んでいくと素敵な関係が出来上がると思います。

互いに協力し合えることが、どんどん一つずつできていけば良いなと思います。先ほど紹介した、

ゆりかご水田もそうですし、まさにここ（風蓮湖）で生まれている活動もそうだと思います。それが無理のない範囲で自分のできる、ちょっと空いた時間、あるいは時間のたくさんある人は時間を、お金がたくさんある人はお金をだせば良いだろうし、それぞれが持てるものを持ち寄って「できること」それを探して、これができたね、できたねっていうことを一つ一つしていけることで、人のつながりが生まれると思います。

スライド：まとめ

皆さんに、質問です。

1. あなたが守りたい、風蓮湖の宝物は？
2. それと一緒に守ってくれる可能性のある関係者は？
逆に、それを損なわれる恐れのある関係者は？

↓

自分の想いを、伝えましょう。

相手の想いを、聴きましょう。

自分が協力できることを、探しましょう。

最後に今の話を振り返って、こんなことを今日考えてもらえたらいいなと思ひまして、皆さん一人一人が風蓮湖で「好きだなあ」って思うことはなんでしょう？色々あると思います。忘れられない体験がある方もいらっしゃると思います。そういうものを大切に大事にしたいと思ひてほしいなあ、と思います。

それを一緒に守ってくれそうな人は誰だろう？あるいは、私が大事にしているものに、あの人は気づかずに壊してしまうかもしれない、というのは誰だろう。そういう人に対して、自分の思いをちゃんと伝えることは大事だと思います。それからもうひとつは、相手の事情、相手の想いもあると思います。そのなかで自分は自分なりに、お互いに協力し合えるものを探していければ、自分はちょっと手を出せない、そうすると相手の人が、手を差し伸べてくれるかもしれません。

そういう関係が、今日（このセミナー）をきっかけにして、新しい絆が生れるといいなあと思ひます。

今日このあと、ディスカッションがあつて、そのあとさらに、隣の建物で勉強会が企画されていて、これは誰でも参加できるそうです。一般の方も来てくれるといいなあと思ひます。じゃあ、ここまでを私のお話とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

スライド：

今日ここから、
また新たな絆が生まれますように。

パネルディスカッション「風蓮湖の今（いま）を考える」

コーディネーター：辻井 達一 氏（財団法人北海道環境財団 理事長）
パネリスト：村上 悟 氏（NPO 法人碧いびわ湖 代表理事）
安部 政博 氏（風蓮湖流入河川連絡協議会 会長）
松原 政勝 氏（風蓮湖流入河川連絡協議会 副会長）
手嶋 洋子 氏（財団法人日本野鳥の会 チーフレンジャー）
深沢 博 氏（朝日新聞根室支局長）

（司会） それではステージの準備が整いましたので、これよりパネルディスカッションを始めます。

コーディネーターとパネリストの皆様を御紹介します。

コーディネーターは北海道環境財団の辻井達一理事長です。

パネリストの方は、本日の主催者の一人であります風蓮湖流入河川連絡協議会の安部政博会長です。

同じく風蓮湖流入河川連絡協議会、松原政勝副会長です。

続きまして、日本野鳥の会で春国岱ネイチャーセンターに勤務されています、手嶋洋子チーフレンジャーです。

朝日新聞の記者でありまして、現在は根室支局に勤務されています、深沢博支局長です。

最後に、先ほど講演を頂戴しました村上悟さんです。

本日は「風蓮湖の今を考える」をテーマに議論していただきます。それでは皆様よろしくお願ひします。

（辻井） 先ほどの村上さんの話をベースにして、風蓮湖の今そしてこれから、というテーマでパネルディスカッションをしようと思います。

今の村上さんのお話の中に、いくつかキーワードみたいなものが出てきたわけです。例えば、琵琶湖の場合ですと循環という言葉が出てきました。琵琶湖というのは、皆さんご存じのとおりで、大阪・京都の水源地でもあるわけですね。ですから琵琶湖の水が、淀川（あの辺ですと非常に大きな川ですけども）が京都から大阪に向かって流れて、あの辺り一帯の市町村の水源地にもなっている。その点では琵琶湖を守る、琵琶湖の水質を維持することは非常に重要な問題になっているわけです。ですから、琵琶湖はそんなに標高の高いところではありませんけど、そういう点でいっても、たとえば風蓮湖が一番の下流としますと、根釧台地のいくつかの川が風蓮湖に流れ込んでいる、そういう関係にちょっと似ていると言ってもいいのではないだろうか、上流の環境として非常に重要なものを持っている。というふうに考えていただくと、分かりやすいかも知れません。

さっき終りのほうに質問が出てきました。ひとつは風蓮湖の宝物は何なんだ？ 一体どういうものなんだ。もう一つは、関係者、これ良い意味の関係者もあるし、悪い意味と言ったらいけませんけども、言ってみるとプラスの関係者と、ある場合にはマイナスの関係者、これはどこに置くかで随分と違って来るわけですけど、そういう人たちは誰なんだろう。そして、その人たちと話し合うことが、できるのかどうかということ、というような質問があったわけですね。

ここにパネリストとして出てきてくれた人たちは、まさにその関係者である。いろんな立場

の関係者が集まっていたいて、どのような話が出るだろう。ということです。

まず一つ関係者なるものの、言い分を聞いてみよう。伺ってみたい。自分はこういうふうを考えているんだ、自分としては風蓮湖の位置づけとしてはどこにあるんだろう。ということについて、お話を伺ってみたい。じゃあ、安部さんから始めましょうか。よろしくお願いします。

(安部) 初めに風蓮湖流入河川連絡協議会ができたいきさつを言いますが、それは先ほども話題にでておりました風蓮湖のシジミが、僕たちが中学生の頃は湖に入ると足の裏が全部シジミだった、それが全然採れなくなった。7000万の漁獲高をあげていたシジミが全くいなくなった。それは風蓮湖のシジミの層に20cmの土砂が溜まった状態になった。さて、その土砂はどこから来るのだろうか。きっと、その全てがそうでないにしても、上流にその原因の一端があるとすれば、上流にいるのは我々酪農家ですから、酪農家もそのことについて真剣に考えなければいけない時期に来ていると考えたわけです。残念ながら、酪農も厳しい時代になったものですから、自分たちの生活が優先で同じ町内に住む漁業の人たちの苦しみ、あるいは風蓮湖にシジミがいなくなったということに、気づいていながら気づかない振りをしていた自分たちに反省をして、漁業者と一緒に風蓮湖の再生、シジミの再生、シジミは非常に難しいものですが、先ほど村上先生が言われたように、農業者と漁業者と一緒にやることによって、その絆を保つことによって、色んな相乗効果で環境の維持向上が図られるのではないかと、これが我々の、この協議会の考え方です。

(辻井) 続いてですね、連絡協議会としてシジミは一つのキーワードになるというところからお話をさせていただいたのですが、言ってみると色々な影響の受け手である、じゃあ松原さん、今の現状はどうなのか、どのように考えていらっしゃるのか、ということはどうぞ。

(松原) 私は親子三代にわたって別海の前浜で漁業をしております。私は三代目で、今は息子も漁業の跡を継いでいるのですが、なぜこういうことに取り組みなきゃならないかということだったんです。

風蓮湖というのはサケ・マスを始めニシン、それから貝類ではシジミ・アサリ、こういうものが人口の割にはすごく、資源的には豊富で、それを専業として生活している人が沢山いたわけですが。ただ残念ながら内陸の開発、農業開発がどんどん昭和45年頃から進んで、当時は新酪農村建設という、道東に、大きな国の政策で農業開発が進んだわけです。

さらには風蓮川の上流には、自衛隊の日本一大きな演習場があるわけです。この演習場から色んな支流に泥が流れていく。それが勢い風蓮川を通して風蓮湖に流れ出るという現状があったわけです。

昭和61年から平成18年までかかって、15基の演習場の中に砂防ダムというのが造られたのです。これはどういうことかと言ったら、風蓮湖にどんどんどん土砂が流れてくるのを、私たち目の当たりに見ているものですから、何とか別海町に泥を止める対策をしてほしいという要請をしたわけです。それはコンクリートで造ってくれと言った訳ではなくて、要望先の国では砂防ダムというものが平成18年までにできたわけです。

いずれにしても先ほどから言われていますように、平成12年を最後に、シジミは風蓮湖でもたくさんの資源だったのですが、残念ながらこれを使って生活、漁業として成り立っていかなくなった状況なものですから、やむなく禁漁という形をとらせていただきました。

別海漁協と根室湾中漁協の二つの組合で、十数人の人が他の魚種に転用せざるを得なくなったということで、平成13年からそれぞれ別な漁業に転業しています。その人がたは今でも、

もう一度、風蓮湖がきれいになったら、自分たちの手でシジミを採ってみたいという願いを持っています。でも残念ですが歳も歳ですから、それはもう不可能ですが、そういう思いを未だに持っている方がおり、私は常にそれを肌を感じている。

今日はラムサール条約が平成17年に設定されまして、私いつか大きなセミナーを開いてほしいという願いがありまして、本当に感激しています。

どうぞ皆さんのご意見を伺いたいと思います。

(辻井) ありがとうございます。

風蓮湖の水産物としてはシジミだけではないというお話があったのですが、シジミは日本の水産物の中でも重要な部分を占める、私の知っている限りですが栄養的にも優れた食材であって、亜鉛が含まれている。摂取するのに有効な方法である。

北海道にはまだ何か所も、たとえば天塩のシジミもかなり有名なのですが、すぐれたシジミの生産地としていくつかあるのですね。その中の一つだったのが、この風蓮湖だった。それは非常に重要な問題なのではと、今のお話にもでてきました。

ひとつは上流からの問題、それを考えてらっしゃるお二人にお話を伺いました。

それで三人目には、上流だ下流だといったことではなしに、風蓮湖は日本の湿地の中では鳥の集合するところ、あるいは通過するところとして、非常に重要な場所である。その点で、今度は手嶋さんにお話を伺いたい。よろしくどうぞ。

(手嶋) よろしくお願ひします。

今お話にあったとおり、ご存じの方も多と思いますけど、風蓮湖・春国岱は全国的に、世界的に見ても、野鳥がたくさんすんでいる。特に珍しい希少な野鳥が生息しているということで、有名な場所になっています。

数字でいいますと、日本中で記録されている鳥が550種類で、その中の六割方310種類くらいの野鳥がこの周辺で記録されている、それだけでもかなりの大切な生息地だということがわかんと思います。私、野鳥の会という立場で、職場が春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンターということもあり、野鳥を切り口としていますが、風蓮湖・春国岱の自然環境をどうしたら守っていけるか、市民の方と一緒に活動しています。

私はもうひとつ立場がありまして、根室ワイズユースの会にも入っておりまして、このグループは2005年のラムサール条約登録後に、根室市の市民の方が風蓮湖・春国岱の自然を壊さないように、でも利用しながらうまく共存できないかを考えようと立ち上げた会です。

野鳥が大変有名なので、野鳥を切り口に何かできないかと、エコツアーを始めています。2月に「ねむろバードランドフェスティバル」というお祭りをしていまして、野鳥関係者だけではなくて根室湾中部漁業協同組合などの協力を得ながら、市民一体となってワイズユースの道はないかと考えています。そんな活動を、現在進めています。

礎となるのはやはり野鳥が豊富だということですね。風蓮湖・春国岱の魅力の一つだと思っています。

(辻井) ありがとうございます。

それでは四人目に朝日新聞、今、根室にいらっしゃる深沢さんにお話を伺いたいと思いますが、深沢さんとはもう二十数年前からのお付き合いがあります。自然派の記者だと言ってもいいと思います。

ことに北海道自然百選という本をつくったときに一緒にやりました。二十五年前あるいはも

っと前かも知れませんが、そのときの風蓮湖をご存知なわけです。二十五年ぶりに根室に勤めて、風蓮湖を見て、感想から伺ってみたいと思いますが、どうでしょう。

(深沢) 深沢です。

今、辻井先生に言われたとおり二十五年来、昭和六十年・1985年、日本の自然百選で朝日新聞が全国のすぐれた二十一世紀に残したい日本の自然ということで、やりました。全国の中で北海道は二か所しか選ばれなくて、北海道でやろうよと言って辻井先生を座長に選びまして、ちょうど私が担当させていただきまして、道東、風蓮湖・春国岱、別海町であれば野付半島・尾岱沼、もちろん霧多布そして別寒辺牛、この道東の素晴らしいところを取材で回らせていただきました。

当時、今思えばシジミが1985年に最高の漁獲をあげているということで、僕がここで二十五年前に取材したときに一番の話題が湾岸道路といいますか砂州をつなげて道路を造ろうと、それに野鳥の会の人たちが、かけがえのない自然だから道路を造るのはやめようということ視点にして、記事を書いた思い出があります。

僕が一番印象に残っているのが、北海道は自然が豊かだというのが、その中でも道東の、風蓮湖は汽水湖ですけども、野付は湾ですけども、そこにつながる自然、湿地といいますか、これはもうかけがえのないものだのと、もっとすごいのはそこに人々の生活があるということ。漁業をしている人、後背地には広大な酪農地帯がある。そういう中で、今、水質汚濁だと色々ありますけども、見た限りではわからないですよ。

非常に素晴らしい自然があるのが、ひとつ。もちろん鳥もそうですけども。

僕が二十五年ぶりというか、去年根室支局に転勤してきて、そこで風蓮湖を毎日のように見て、とても楽しみでして、昨日はタンチョウが戻ってきたなあとか、オオワシ・オジロワシの若鳥がカラスにいじめられているなあとか、通るたびにとても楽しいんですけども、そういうなかで漁業者と酪農家と一緒に、シジミがなくなったというのに驚きまして、去年の秋に湖上視察会と一緒にいかせてもらいまして「シジミ待つ風蓮湖・復活目指して奮闘続く」という記事を書かせてもらいまして、シジミというのが分かりやすいキーワードになる。

僕が旭川にいたころ、天塩のシジミもかなり減っているのです。まわりの開発が進んで、非常に環境に敏感であるというような中で、それだけではないと思いますがシジミをキーワードにし、見ただけでは分らない自然の中身の素晴らしさを、皆さんと（先ほど村上さんがおっしゃいましたけど）絆を深めて、さらに素晴らしいものにしていくというお手伝いができればと思っています。

(辻井) ありがとうございます。

今のお話に出てきたのは、この新聞記事です。シジミ待つ風蓮湖という、漁消え10年・復活目指して奮闘続くというサブタイトルがついています。こういったことが二十五年前からどう変わってきたか、一つの例と言ってもいいのかも知れない。シジミをキーワードにしてもいいのじゃないかという話があったけども、シジミだけでは勿論ないけども、シジミが復活するというのは風蓮湖が復活することだ、というふうに言い換えてもいいのじゃないかということだと思います。

さて、四人の関係者のお話ができました。村上さんに四人のお話質問があったらお話してください。またあとでもう一回くらい回しますから、その時にぜひ、先ほど村上さんが言ってらっしゃったキーワードの中に「伝える」ということがありました。どういうふう伝えるかが大事、

守りたいものを伝えようという言葉があって、これはやっぱり子供たちを通してというのが大事じゃないかと思って、もう一つは、子供たちに伝えるということについて話をしてほしいと思います。忘れるといけないので、先に申し上げておきます。

四人のどなたにでも結構ですけども、お聞きになることがあれば。

(村上) 急に振られて大変困っているんですけど(笑)

まず手嶋さんにお伺いしたいのですが、ここの地域はとても鳥が豊富だというふうにおっしゃいますよね。なんでですか聞かれたときに、どういうふうにお答えされているのですか？

(手嶋) 多様な自然が、湖があり草原があり湿地があり、さまざまな環境が湖沿いに残されているということが鳥の生息に貢献しているのと、その一つ一つの規模が大きな鳥が棲めるだけの広さを持って残されているということだと思います。

(辻井) 環境の多様性が大きい、そういうことになるのかな。

(村上) もう一人、深沢さんにお聞きしたいのですが、先ほどおっしゃっていた自然が豊かだということと、そこに暮らしがあるということが、ほかの地域と比べて独自性があるということなのですか。

(深沢) 北海道は本州に比べれば、一次産業を中心にとということで、(同じことになると思うんですけども)自然がなければ暮らしていけない。琵琶湖の付近でも工業生産が大きいと、そこは自然とかけ離れるわけですよ。漁業をしているというのは、それなりに暮らしと自然と、自然がなければ魚もいなくなるし、よくないということが肌で分かっているから、それは特に北海道だけではないと思いますが、特にこの道東の自然と人の営みの関係というのは、言葉でちょっと言えませんが、非常に密であると。たとえば、羅臼も根室の管内なので、羅臼と斜里と一緒にすると離れるかも知れませんが、知床を世界遺産にするときに、厳しい自然の中で魚を獲れているんだと言う。自然を守ろうとかではなくて、自然の中で僕たちは生活しているんだよ、その根っ子のところの気持ちが強いのは、道東の、厳しさの中に豊かさのある自然の中で人が暮らしていることじゃないか、と思っています。

(村上) ありがとうございます。本当に良いお言葉だと思って。

滋賀県なんて、こういうところに来ると、街だなあって思うんですね。それぞれの暮らしをしているのだと、改めて感じました。

昨日、安部さんのところと松原さんのところに寄らせていただいたときに、家族で支えあってらっしゃるなあと、すごく感じたんですね。こういうものっていうのは滋賀県の、特に南部の街のほうではほとんどなくて、ほとんどがサラリーマン世帯ですから。おそらく東京とか、都市部と似ている状況だと思うのです。

家族という身近な人同士が、信頼し合って支えあっている姿というのは、この地域には原型のようにいきづいているんだなと、実は僕、衝撃みたいになりまして、自分を省みるという体験をさせてもらいました。

(辻井) ちょうど鳥の話がでましたから、私も思い出して、手嶋さんに伺いたいんだけど。手嶋さんに伺うのと同時に深沢さんにもお答えいただければ。

自然豊かなところにも、それに慣れすぎているとその良さにわかんなくなるということがあるかも知れない。会が始まる前に、ちょっとそれめいた話を手嶋さんとしていました。たとえば、オオワシは、ここ北海道とサハリンくらいにしか見られない鳥で、土地の人たちはしょっちゅう見てらっしゃるから、あんなもん何が珍しいんだということになる。ここにしか見

られないからイギリスから随分お金をかけて、たくさんの人が見に来ている、という話をさっきしていたんですね。そういうことあるんじゃないかと思うんですよ。そんなことも含めてもうちょっと、ここの特徴をお話してくれば。案外、気がつかないということをおね。

(手嶋) ネイチャーセンターにいますと、地元の方も来て下さいます。私は愛知県から来た余所者なので、毎日驚きの繰り返しです。オオワシがこんなに飛んでいる、タンチョウが普通に子育てをしていて、そういう風景が漁師さんの隣にあるというのが、遠くから来た人から見ると魅力的なことになるのです。地元の方は「いつもいるよ」っておっしゃって「それが何か」といった感じで返されることも多いのですが「すごいことなんですよ」という話をすると、とても驚いて「自分たちの自然を見直すよ」というお話を聞くことが多いです。

(辻井) それで、もう一つはですね、自然そのものではないかもしれない、あるいは自然だけでは駄目というか、人間との関わりみたいなものにね、これはどっちかというところ、深沢さんの領分になると思うんだけど、オオワシにしてもオジロワシにしても、彼らは人が獲る、例えばタラ漁の獲れたものを狙って、それで結構食べているという話もある。

(手嶋) 最近よく話題になりますけれど、風蓮湖の氷下待ち網漁のまわりにはワシたちが一杯集まってくるという風景がよく見られます。確かに16・7年前にくらべると風蓮湖でのワシの越冬数の割合は増えてきていますが、逆に昔多かった羅臼では減っている。基本的に魚を食べる鳥なので、人間の漁業資源など、エサを捕りやすい所に移動してきているようで全体数が増えてきているわけではないようです。自然地での採食場が無くなってきているというふうにも考えられています。

(辻井) 深沢さん、どうですか。実際そういう場面をご覧になったでしょ。

(深沢) だから、オオワシ・オジロワシ、オジロワシというのはここでも繁殖していますけれど、オオワシと言えば羅臼と。スケトウが採れなくなってからですよ。どんどん分散してですね、浜頓別にはワシの成る木ですとかね、あそこはウソタン川という北海道でも数少ない捕獲場のない、自然湖上の夥しいホッチャレが、真っ白になるくらい川の底にいる。そこにパーッと集まっていますもんね。

今年クンベツ川にもものすごく集まったとかですね。

あとは内陸にも入っているんですね。これはシカじゃないかと。エゾシカが増えて、ハンターさんの置いて行ったものか自然に死んだものか分かりませんが、昨日も環境省が発表していましたけども、鉛中毒のワシがまた見つかったという話もありますけども、要するに人との関わりですね。野鳥も含めて野生生物、自然というのは人と関わってできているのだろうと。

(辻井) さてそれでは、すぐれた自然をもう一遍見直すことも大事なんだけど、人間の世界ですね、次は。そこでまたお二人、安部さんと松原さんのお話に戻して、していただくと思います。

じゃあどうすればいいんだということを、あるいは今こういうふうに動いているんだと言っていただけでも結構だ。安部さんどうぞ。

(安部) 先ほど村上さんのお話のあとのほうにですね、私たちの協議会も木を植えたり、下草刈りをしたり、風蓮湖の調査をしたり色々なことをしているのですが、僕たちの時代というのは、そう長くは続かない。先ほど村上先生が、うちの高校生が参加してくれていることに良いことだと言ってくれたのですが、やはりこれから子供たち、若い人たちを巻き込んだ活動が必要なんだと思っています。

子供たちの未来を守る、地域の絆を育むことが必要である。そういうことから、ドングリ

を拾って「ドングリ教室」ということで、今日、上風蓮の保育園の子供たちが卒園したのですが、その卒園した子供たちが入ったところに、今は小学一、二年の子供たちが植えたドングリがやっと今年の夏、山に植えることができます。そういった活動を通じながら子供たちにもしっかりと環境の大切さ、水の大切さを伝えていかなければならないと思っています。

今回、私たち協議会がアサヒビールからの支援をいただいて行う活動の中で、この「ドングリ教室」、山の子供たちはふれあう機会が多いですけども、今年は別海の街の高校の農場の一画を借りて、街の保育園児・小学生に集まっていたいただいてドングリを植えて、その成長を見守ってもらう、そのような活動を手掛けていきたいなと考えております。

(松原) 会の取組みは今、安部会長のほうから、今後に向けて子供たちも含めて、将来このようにやっていくんだよというお話をされました。

私は生産者ですから、自然のみが自然をつくり得るという言葉があります。これは自然の摂理であるのです。当然、一度汚されたもの、土砂が堆積してシジミが死んだ。でも年数がかかるうちに…自然は休んではいけないのです。毎日、流れるなり、どうにかなっているのです。ですから、いずれ2年、3年、5年と経つとそれが元に戻るだろうと、そういう考え方でいたのですが、この数十年で環境が破壊された、まではいなくても環境が悪化したことは、やはり自然では元に戻らなかつた。そういうことをつくづく感じているのです。ですから、役所に、町を含め道含め国含め、堆積した土砂を除去できないのかと。それを言ったって、簡単に要望すれば、簡単にできるものではないと思うんです。それはそれとして受けとめながら、資源づくりとか漁場環境を少しでも良くしていく、そういうことを漁協なり、うちの組合員もそうですし町・道・国も含めて、これから進んでいかなければならない。いつも悪い悪いと苦情ばかり言っていたのでは、前に進まないと受けとめているところです。

(辻井) 今の、人がやったことなら人が手伝ってといたしますかね、自然のままに放つといて上手くいくというものではないのだから、そこまでの回復に人が責任を持たなければならない、というお話がありました。

実はですね、同じようなタイプの、風蓮湖だとかサロマ湖とか、厚岸湖もそうだと思いますけど、海に開けたラグーンというものです。あるいは潟湖という、あちこち日本にありますけども、たとえば本州なら宍道湖もそうです。宍道湖もシジミで有名な所です。ここも水質が悪くなって問題が起きている。あるいはシジミを採りすぎて小型化してしまったとか、色々な問題を抱えていたんですけど、今どうしているのか。結局それは人が余計にやりすぎたことを反省して、どういうふうにするかと考えながら、また戻したのです。

面白いことに、インドにチリカ湖というのがあって、琵琶湖の2.5倍位ある大きな湖でね。桁外れに大きい、多分アジアでは一番大きなラグーンだと思うのですが、湖の中にイラワジカワイルカという淡水でも海水でも行き来できるイルカの仲間がいるんですよ。これが湖の口がふさがって出られなくなってしまう。イルカだけじゃなくて問題は、湖の口がふさがってしまいますと、中に色々なものが溜まってしまうわけです。それで大いに困ったんですね。ここもラムサール登録地になっていまして、ラムサールは登録されるとそのままというわけにはいかないのです。条件が悪くなると取消されるのですよ。

風蓮湖も下手をすると、イエローカードを切られるかもしれない。シジミは昔はいたけど採れなくなつたじゃないか、指定当時とずいぶん違うぞということになると、キャンセルされる恐れがある。

今、例に挙げたインドのチリカ湖というのは、イエローカードを切られた。今のままで改善されなかったらラムサール登録地を取消す、と言われてたわけですね。そこで、どういうふうにするのかサンプルをサロマ湖に求めた。それは私が紹介したのですが、サロマ湖では口を切って海水を入れて永久湖口をつくって、中の水と外の水が入れ替わりできるようにした。それで、昔、北海道でも一番貧乏だった漁協が、かなりいいところまで裕福な漁協になった話をしたら、それをサンプルにしてインドのチリカ湖は改善に乗り出したのです。今、ちゃんと元のように戻って、イルカも出たり入ったりできるようになって、数年前にラムサールの湿地保全賞、ご褒美をもらう位になった。ところが、ついでに申し上げておくと、サロマ湖はまだラムサール登録地になっていないのですよ。お手本のほうがなくなってないんですね。でも中味はそれをサンプルにして、良い先生としてチリカ湖は非常に優れた登録地になった。そういう例もあります。

そのようなことを御紹介しておきますけども、今のお話の中で松原さんが、自然を回復させるのに長い時間がかかるだろう。そうすると我々ばかりじゃなくて将来の子供たちに受け継いでいかなきゃならない。という話をなされた。村上さんに最後にですね、私もご一緒しましたけども、2008年・韓国のラムサール会議のときに子供たちを連れて行ったでしょう。その話をしてください。

(村上) 今お話あったのは2008年に韓国で締約国会議がありまして、日本で93年であった以来のアジアで開催された締約国会議だったのですが、滋賀県も参加してその時に近くでもあることなので県内から子供たちを連れていくという、県からの企画がありまして10人ほどの子供たちと一緒に連れて行きました。私は添乗させてもらったのです。県の事業だったので、連れて行けばそれで予算消化できるのですが（笑）それでは勿体ないなと思ひまして、できるだけ心掛けたことは、琵琶湖のことを自分たちが知るようにしようということで、事前に学習していったことと、地元で得たものを持ち帰ってもらいたい、地元での活動に持ち帰ってもらうために、そこでまさに伝える力を身に付けようということだった。そのために事前学習の時から自ら取材をし、それを人に伝えるトレーニングをやって、韓国にも自分で作った新聞を持って行き、韓国であったことを自分でまとめてというようなことをしました。成果としては、限られた日数だったので、何ができたのかはわからないんですけども、その時の子供たちと交わした想いは今でも繋がっているなあという感じがしています。やっぱりイベントで出来ることは限られていて、日常的な関わりというのが大きいんじゃないかなあと思っています。私がこういう形で、湖の保全に関わるような仕事をずっとし続けるようになったのも、家族の影響が大きかったらなあと思いますし、日常的に親とか身近な人が当たり前に行っているのが一番大事じゃないかなあというのは思います。ですから、酪農にしても今すぐできることって限られている、時間・予算等々のなかで出来ることは限られているだろうけどそれに向かっていく姿勢というのは絶対に伝わると思うんですね。

ちょっと話が飛びますが、私はラムサールの会議でその前のバレンシアにも行ったんです。スペインのバレンシア。あそこの近くにバルセロナという街がありまして、そこにサクラダファミリアという大きな教会があるんですね。サクラダファミリアはガウディが設計した建築なんですけど、そこを見に行きたくて帰りに寄ったんです。その時にすごく感動したのは、あそこは未完成で、ガウディが残した設計図をもって皆さんが設計図を書きながら徐々に造っているんですね。しかもそれは寄付で賄われていて、働いている職員がものすごく誇らしげなんです

よ。俺はこの仕事に携わせてもらっているんだという誇らしい姿がありまして。その姿を見て、あーこういうことかなあと思ったんですね。地域づくりとか湖の再生とか、言葉でいくら言っても進まない。身近な人が今できる限りの努力をしている、そういうことが一番伝わることではないかと、僕は感じています。

(辻井) ありがとうございます。実はかなり時間が迫ってきました。

最後に一言ずつお話をいただきたいと思うんですけど、安部さんからどうぞ。

(安部) 冒頭に申し上げたように私たちの組織は、農業の人と漁業の人が一緒になっています。自分たちが言いたいことがきつとあると思うんです。でもそれを我慢しながら行動に移してきたということが良かったんだと思います。これからも気持ちというものをしっかりと伝えながら話すことよりも皆で行動をする。動く、ということに重点を置いて頑張っていきたいと思っています。

(松原) 風蓮湖の水がきれいになってきたということをお願いしたいと思います。17年に家畜ふん尿の法律ができました。それぞれの酪農をやられている方、家畜を飼っている方がきちんと処理をする管理をするということができたと思います。それから草地改良が落ち着いてきたこと。一番上流にある自衛隊の演習場の中が整備されたということです。見事に整備されました。

そういう条件が良い方に重なって、ここ5年くらいで水がきれいになってきていることを私の眼で感じています。特別な機械を使って観察しているわけではありませんが、6月15日と9月15日の2回を風蓮湖に出て、どのくらいの透明度があるか水は臭いがしなくなったか、自分なりに毎年ノートにつけています。

2月から3月の一番の厳冬期なんですけど、この時期、風蓮湖は結氷しています。一晩でマイナス15℃から20℃くらいですと5cm位の氷がはります。以前は、ま、ここにお茶がありますけど、このような色の氷だったんですけど、最近は曇りガラスのような氷になって、これはいかに上流からそういうものが流れなくなったのかな、よくなってきた。

水が臭いがしなくなった、透明度が良くなった、私が一年を通して自分なりの調査で決定的ではないんですけど、そういうことを常に記録にしながら、大事にとってあります。安部会長とよく話をするのですが、皆さん一人一人の考え方が浸透できたんだと、我々が何十億も使って何かをするわけではないのですから、少しでも皆さんに環境についての認識をしてもらえれば、ありがたいなと。

その結果がこの3年、5年で水が良くなったし臭いがしなくなったなと。良い結果だと心得ています。

(手嶋) 私は今日ずっと鳥の視点からお話させていただいたのですが、鳥にとっても人にとってもベースとなる自然が豊かに残されているのが、生活の基本になると思うんですね。私たちが鳥をテーマにしているのは、見やすいとか見つけやすいためです。数の増減は毎年数えりと把握できますし、私たちが必要としている自然環境の状況を鳥の目線でも把握できますので、興味を持っていただけると色々な環境の変化というものを気づいていただけたらと思っています。鳥と自分たちとの繋がり、先ほどの漁業とワシの話もそうですけど、そういった視点で、もう一度、野鳥にも注目していただけたらいいと思います。

(深沢) 松原さんの、最近臭いがしなくなった透明度が上がってきたというのを聞きまして、じゃあデータはどういうものになっているのかということで、道庁に聞いたり環境科学センターに聞いたり漁協がお願いしている先生ですとか、それぞれ非常に難しいんですね。BODはそんな

に下がってないし、リンとかなんとかって、川で調べたのと湖で調べたのと（でも違う）。汚れているとか環境が悪くなっているとか、あるいは良くなっているというのを分かりやすく、子供たちにも皆にも分かるようなものがあるといいなあというのは、私が記事を書くときにも悩むんですけど、そうすると「ああ、そうか」「これがもうちょっとこうなるといいのか」。複雑な要素があると思うんですね。砂の問題もあるし、それをうまく（判定）できるような指標みたいなのがね、あるといいなあというのが一つ。

農業者と漁業者がうまく活動なさって、これから更に広がっていくところを非常に期待しております。僕、霧多布もずいぶん長く見ているんですけど、拠点があるといいですね。湿原センター、あるいは黒松内のブナセンターだとか。そこが拠点になって色々な人が集まって、それが手嶋さんのところ（春国岱NC）になるのか（笑）それは分かりませんが、野付にはセンターがあり、根室・春国岱にあり、羅臼にもビジターセンターがある。別海・走古丹あたりに何かがあれば良いなというふうに、無責任に言いますが（辻井コーディネーターが発言「風蓮湖の環境時計みたいなもの」）はい、みたいな、ね。…風蓮湖、せっかくあるから、春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンター…非常に長すぎるんですけども。広く色々なところが加えられるような所があれば良いな。それまでにはこれから色々な人が手を取り合っ、できることからやっていく。支えあってやっていければ、非常に楽しいんじゃないかと思いません。

(村上) これからの時代は「人の力」がもう一度見直される時代だと思います。（私たちは）石油に頼ってきた時代ですから。でも、そういうのが無くなってきて、もう一度人の持っている力がスポットライトを浴びる時代だと思います。今の、水の話もそうですが、私たちが肌で感じることとか耳で感じる事とか、感じ得ることはすごい力だと思いますし、この体でできることは実はたくさん結構ある。そのことを、道東の皆さんの暮らしとかは、発信できる所じゃないのかなと、深沢さんの話を伺って、昨日今日いるだけですけど、すごく感じています。

僕らの子供くらいが修学旅行に行くのだったら、道東に行って一遍見て来いという（笑）暮らしてどういふものか勉強してこいよ（笑）と言える感じになるんじゃないかな、と僕は思ったりしていました。

これからの時代で、もうひとつキーワードになるのが分業したり別れていく一方の反対の、人間として色々なものを統合していくことだと感じています。漁業者だ農業者だという、どちらかの立場になるのではなくて、特に子供のころから色々な体験をしていくことが大事ななと思っています。私が大工を習っていた親方が、農家の人と二人で新しい試みを始めました。田舎暮らしをするのに建築と農業とどっちも身につけた方がいいんじゃないかということで、3年間大工と農業を身につける、塾のようなことを始めました。

この地域でも、今日も高校生のみなさんがいらっしゃいますが、メインは酪農の勉強で来ていらしていると思いますが、漁師さんのところに行ってみる、湖の調査を試してみる、色々なことをできる時間を持っているわけですから、そういうことにもチャレンジしてみて自分の幅を広げるのに、こんなに良い場所はないんじゃないかなと思いますし、松原さんなりが協力していただけないかな、と勝手に思っています。ありがとうございました。

(辻井) パネラーの皆さんからそれぞれにキーワードを頂戴したように思います。環境時計みたいなものを考えたらいんじゃないかという話もできました。これは若い人に、高校生に考えてもらった方がいいのかもしれない。どういうふうに表現するのか、どういうふうに評価するのかと

いうことを含めて、といったところでパネルディスカッションの時間も終了です。
皆さん、どうもありがとうございました。

(終わり)